

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00328

研究課題名(和文)書籍広告を資料とした近世・近代移行期の書籍流通についての研究

研究課題名(英文)A study on book circulation in the period of transition from the early modern period to the modern period based on book advertisements

研究代表者

鈴木 俊幸 (SUZUKI, Toshiyuki)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：00216417

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究全体の基盤とすべく、江戸時代から明治前半期における書籍関係業者に関するデータを増補・整備し、書籍流通網をその末端まで網羅する作業を継続した。また新聞広告を主たる史料として、明治になって新たに成長していった新聞・雑誌の流通網と書籍流通網との相関とその変化をたどるべく新聞雑誌販売店のリストを作成した。また書籍流通史の変化に大いに関わったと思われる明治十年代末期における書籍安売り流行の実態を追うべく、新聞広告を中心に史料を渉猟し、データベース化した。これらの研究に基づき、兎屋誠に関する論文を作成したほか、新聞雑誌販売店のデータと書籍安売り広告のデータベースを研究者に配布した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治十年代末の書籍安売り流行は、書籍業界の秩序と書籍市場すなわち読者の書籍に対する意識を大きく変えたと思われる。この書籍安売りのほとんどは、新聞広告を戦略的に使ったもので、地方新聞を含めて当該広告を網羅的に収集し、この現象を全国規模で追跡することができたことは、書籍流通史・出版史研究上大きな成果であった。また同時に新聞・雑誌販売網の成長と新聞というメディアの民間への浸透状況、すなわち、読者層そのものの変化を見定める一つの方法を提示し得たものと思われる。

研究成果の概要(英文)：In order to form the basis of the research as a whole, I expanded and organized data on book-related businesses from the Edo period to the first half of the Meiji era, and continued the work of covering the book distribution network to its ends. In addition, using newspaper advertisements as the main historical source, I created a list of newspaper and magazine dealers in order to trace the correlation and changes between the distribution network of newspapers and magazines and the book distribution network, which grew newly in the Meiji era. In addition, in order to follow the actual situation of the cheap book sale trend in the late 1900s, which is thought to have been greatly involved in the changes in the history of book distribution, I have researched historical materials, mainly newspaper advertisements, and created a database. Based on these studies, I wrote a paper on Usagiya, and distributed the database of newspaper store data and book bargain advertisements to researchers.

研究分野：国文学、書籍文化史

キーワード：書籍流通 近世・近代移行期 書籍安売り 新聞広告 新聞雑誌流通 兎屋誠 鶴声社

1. 研究開始当初の背景

書籍についての文化史的研究が、多くの学問領域、すなわち、国文学・芸能史・メディア史・日本史・思想史・教育史等において行われ、新たな成果が生み出されるようになってきた。また、この学問領域を横断して研究情報を共有し、統合的な成果を模索する試みも長く続いてきた(鈴木俊幸編・発行『書籍文化史』、若尾政希呼び掛け「書物・出版と社会変容」研究会等)。書籍という視点は、日本の文系諸学を束ねることを可能とする切り口であるという認識が定着してきたが、そこにとどまるだけではなく、国際的な連携を確保するのに有力なテーマともなってきた。欧米においても、日本の摺物や書籍についての研究は盛んになっており、研究水準もかなり高い。また、中国や韓国における書籍文化史研究を行う研究者も、それぞれの国はもちろん、日本人研究者も少なくなく、東アジアという大きな枠組みで、書籍の文化とその歴史を把握しようという試みもなされている。

既存の学問領域や国を超えての連携的研究が実際に行われつつある中で、ますます重要になるのは、まず研究蓄積と資料情報を含めてデータの国際的な共有である。そして、従来の研究を、新たに浮上した確実な資料に基づいて検証し、書籍文化の歴史を正確に把握し直すことであると思われた。

日本における研究に限って、近年の研究蓄積を総括してみると、各領域で個別の事例にもとづく精緻な研究が多くみられるものの、制作から享受に至るまでの書籍の文化全体の歴史を、地域・階層による偏差を視野に入れながら、総合的に描こうという姿勢は希薄である。特に、近世から近代に至る過渡期については、実証に基づく研究成果に乏しく、いまだ誤謬に満ちた概念的言説がまかり通っているきらいがあった。ジャンル全体を視野に入れながら、出版行為を、書籍流通を主たる視座として読者との相関を確たる資料に基づいて、書籍文化の歴史を叙述した研究が必要であると思われたのである。

また、歴史叙述の常として、新規の事象、トピックを軸にして構想された研究がこれまで多いが、それは時代の正確な把握とは言えないであろう。新しいものの出現はそのまま旧来のものの撤退ではないことは当然である。明治になっても、しばらくは近世的な状況は各分野で続いていたはずで、それは書籍の文化についても同様である。近世的なものがどのように明治に継続され、それがいつまで続くのか、という視点から歴史を描くことによって、より正確な時代像を結ぶことができると思われた。

上記の姿勢と大いに関係してくるが、著编者・出版者といった書籍製作者側からのみ書籍文化の推移をたどる試みがこれまでの研究のほとんどであった。したがって、享受者についての実証的考察は捨象され、読者の動向については、ごく概念的な理解のまま棚上げにされてきた感が強い。制作から享受まで一連の、あるいは循環的な営為を総合的に捉えて、実証的に歴史を描くことができている。これが近世・近代移行期の書籍文化史に関わるこれまでの研究の大きな弱点であり、これを克服し、正確な時代像とその推移を描き出す必要があると思われたのである。

2. 研究の目的

当該研究は、書籍の文化の史的变化とその要因、また逆にその変化がどのように文化全体に作用したのかを究明し、文化基盤の整備状況と民間知の様相の変化を時代の推移とともに捉えることを目的とした。具体的には、近世後期から明治前半期までを対象とし、近世的書籍出版・流通機構(書物・草紙・貸本)がどのように新しい時代を迎えていったのか、また何によって変化、あるいは解体し、新たな機構がどのように整備されていったのかを正確に跡付けることによって、書籍の市場、すなわち読者層の変化を地域個別、また、全国レベルで捉えてみようという試みであった。

制作から享受までの一連の営為を統合的に捉えるために、書籍流通に視点を定めて、その動向・変化を追うという方法で、近世後期から近代初頭という時期に焦点を当てて新たな書籍文化史像を描き出そうという試みであった。

出版という行為は、時代を問わず、刊本という現物を含めて、資料が残りやすく、したがってこれを主たる資料とした研究が主流をしめてきたものと思われる。それに対して書籍流通の資料は把握しがたく、研究は困難であるというのがこれまでの研究者の認識であったと思われる。当該研究では、書店・書籍の広告を主たる書籍流通史料として用い、近世・近代移行期の書籍文化史を総合的に描き出す方法を提示することを目的の一つとした。

3. 研究の方法

当該研究では、上記の目的を実現するために、以下の3点に注力した。

第1は、近世期から明治前半期までの書店（新聞店を含む）と書籍の広告を調査・収集し、整理した。収集対象は、引札、蔵版・発兌目録、絵草紙屋掛紙、店頭用看板、広告葉書・書簡等である。これを、図書館・文書館等全国の所蔵機関において調査・収集した。特に、明治期になって、教育関係書や省庁備え付け用の布令集など、業者から府県への売り込みも多く、これらは、行政簿冊の中に綴じ込まれて残っている場合があり、これらも対象とした。収集した資料は、形態・発行者・成立年月・内容・所在情報を容易に引き出せるデータとして整理し、当該研究推進の有力な基礎的資料とした。

第2は、絵草紙屋を起点として新たに成長していった新聞・雑誌の流通網についての調査・研究であった。その流通の末端である新聞・雑誌販売店のリストを、新聞広告や引札、また領収書等の諸資料によって作成した。それとともに、この新たな書籍流通網に依存した出版物を調査し、その出版物をもって成長していった兎屋や鶴声社等の書店について個別的にその消長を追ってみた。そして、新聞・雑誌流通網の成立と展開、それが書籍業界の変化にどのように関与したかを明らかにしようとした。

第3として、書籍業界の秩序と書籍市場すなわち読者の書籍に対する意識を大きく変え、書籍文化の歴史を語る上で看過できない明治10年代末の書籍安売り流行の実態を捉えることを課題とした。明治10年代半ば、書籍業界を大きく動かした事象に予約出版の盛行がある。この予約出版流行が終息を迎え始める明治18年ころから、書籍の競争的安売りが行われ始めるが、この流行も明治20年には終息していく。この書籍安売りのほとんどは、新聞広告を戦略的に使ったものである。これについては第2として掲げた新聞・雑誌の流通網についての調査・研究と不即不離の密接な関係を保って研究を展開することを意識した。つまり、この書籍安売りという現象を捉えることで浮上し、明らかになるのは、新聞・雑誌販売網の成長と新聞というメディアの民間への浸透状況であり、読者層そのものの変化を見定めるための有力な視点となると思われるからである。この書籍安売りの実態を明らかにするために、明治18年から21年の地方紙を含めた諸新聞から、書籍安売りの広告を収集し、整理した。それは、業者名・営業地・新聞名・営業時期・営業内容を自由に抽出できるようなデータベースとし、これに基づき、書籍安売りの地域における特色、また広告媒体としての各新聞の機能を捉え、書籍安売りの実態と新聞広告の役割を明らかにしようとしたのである。いっぽう、この書籍安売り流行の先鞭を付け、終始流行の中心的役割を演じた兎屋書店についての事例研究を並行して行った。これについては、その動向を店主望月誠の動静とともに、時間軸に沿って記述した書籍流通史の一コマとなるような論文にした。

4. 研究成果

当該研究を推進していく上で、絵草紙屋を起点として新たに成長していった新聞・雑誌の流通網を把握することは必須であり、その流通の末端である新聞・雑誌販売店のリストを、明治10年代後半から明治20年代初頭にかけての現存諸新聞の新聞広告や引札、また領収書等の諸資料によって作成した。そのデータは、所在地の都道府県によって大別し、その内部で地域ごとにまとめた。さらに、書籍流通に関与した店があれば、そのデータを個別に付加して、営業内容の総体が見えるように仕立てた。この基礎資料は当該研究推進のためのものであったが、「明治前期新聞販売店総覧」と題して研究年度末の段階で公開するとともに、研究者に配布した。

また、新聞の普及にとともなってその有効性を増していった新聞広告を用いて展開していった書籍安売りの実態とその消長を捉えるべく、明治18年から21年を中心に、現存諸新聞を調査し、その広告と関連する雑報記事を収集した。これを、発行年月日・新聞名・広告主・同住所・標題・広告記事・備考の7フィールドのデータベースにし、検索・組み替えが容易なものに仕立てた。当該研究推進のための基礎的データではあるが、この間公表した論文の検証材料にもなるものなので、これについても、データを研究者に配布した（書籍安売広告.csv）。

有力な広告媒体となっていった新聞とその流通網をいち早く利用して営業を展開していった兎屋望月誠については、その出版物も網羅的に調査した。また、兎屋の書籍安売りに追隨していった鶴声社森仙吉や駿々堂、また正札屋・石版舎等の書店についても出版書の調査を行いその消長を追ってみた。この書籍安売りに関して公表した論文に以下のものがある。「『山梨日日新聞』『甲陽日報』所掲書籍安売広告をめぐって」（『中央大学国文』62号、2019年3月、恵良友貴・友成毅・金子美樹・大石明香里と共著）は、甲府での書籍安売り状況を地元紙の広告を調査して得た知見を共同論文にしたものである。とくに安売りを大々的に展開した柳正堂大塚源太郎に焦点を当て、東京鶴声社の強力な支援を受けての安売りであり、鶴声社の全国展開の一端を担ったものであることを明らかにした。「『静岡大務新聞』所掲書籍安売広告をめぐって」（『中央大学国文』63号、2020年3月、友成毅・金子美樹・大石明香里・國分美奈穂・増田凜々・湯沢友実と共著）は、書籍安売り業者の東海地方における広告戦略についての調査報告である。「東京書肆の書籍安売 正札屋・鶴声社・金桜堂と兎屋」（中央大学文学部『紀要 言語・文学・文化』（127号、2021年3月）は、兎屋の商法の跡追いをした正札屋・鶴声社・金桜堂の書籍安売りに焦点を当て、3店の営業展開と兎屋との関係について考察したものである。「兎屋の書籍出張販売」

(中央大学文学部『紀要 言語・文学・文化』129号、2022年2月)は、これまで蓄積してきた地方紙の新聞広告を主たる史料として用い、兎屋書店の消長をたどりながら、兎屋が展開した地方出張販売という新たな書籍安売方法が書籍業界と享受者にもたらした時代的意義を追求したものである。「《共同研究》大阪の書籍安売業者について考える」(『中央大学国文』65号、2022年3月、國分美奈穂・湯沢友実・原田和佳・乙部桃子・小野澤美優・畑中彩花と共著)は、ほとんど地方新聞にのみ広告を掲出し、書籍流通の実績がほとんど浮かび上がらない大阪の安売り業者について考察したものである。「大阪兎屋支店と横山帯川堂」(『書物・出版と社会変容』29号、2022年10月)は、大坂兎屋支店の起立から終焉までをたどり、兎屋の消長との関連を述べたものである。2023-03-25、「愛知県紙に見る書籍流通史の一こま」(『中央大学国文』66号、2023年3月、原田和佳と共著)は、愛知県紙に大阪業者の安売り広告が少なく、また兎屋や鶴声社のものも見当たらないことに注目し、名古屋の石版舎が大々的に書籍安売りを展開したことと、兎屋・鶴声社との関わりについて考察したものである。

以上が、書籍安売りに関係する既発表論文であるが、これ以外にも、近世・近代移行期の書籍文化に関連する単行本・論考を公表してきている。『信州の本屋と出版 江戸から明治へ』(2018年10月、高美書店)は、信州各地域の書商の近世から近代にかけての営業活動を時代状況の変化とともに追跡したものである。「俳書出版の明治 久野禰鶴と摺物所中野屋大助」(『紀要 言語・文学・文化』123号、2019年3月)は近世期からほぼ変わらぬ営業を続けていた摺物所と、これも変わらぬ活動を展開していた旧派俳諧の宗匠に注目し、明治期における木版印刷の実相を捉えようとした事例研究である。「医籍専売書肆英蘭堂島村利助について」(陳捷編『医学・科学・博物 東アジア古典籍の世界』2020年2月勉誠出版)は、幕末に開業した絵草紙屋が明治になって時機を得て医学翻訳書出版の大手として成長していった事例を報告したものである。

「脩道館補説」(『紀要 言語・文学・文化』125号、2020年3月)は、予約出版に先鞭を付けた修道館について新たな史料を得て、再説したものである。「小学校令期東山梨郡における教科書類の流通」(『書物・出版と社会変容』27号、2021年10月)は、僻村の戸長役場が作成した小学校運営に関わる文書を用いて、明治期における書籍流通網の整備状況を捉えた事例研究である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 131
2. 論文標題 越後柏崎文人高野米峰の蔵書と集書 『高野氏蔵書目』と『自適庵叢書備附』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 紀要 言語・文学・文化（中央大学文学部）	6. 最初と最後の頁 117-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸・原田和佳	4. 巻 66
2. 論文標題 愛知県紙に見る書籍流通史の一コマ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中央大学国文	6. 最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 29
2. 論文標題 大阪兔屋支店と横山帯川堂	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 書物・出版と社会変容	6. 最初と最後の頁 95-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 21
2. 論文標題 木版印刷のゆくえ 信州善光寺町の場合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 書物学	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 22
2. 論文標題 浄瑠璃本の流通 抜本表紙に捺された仕入印	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 書物学	6. 最初と最後の頁 68-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 27
2. 論文標題 小学校令期東山梨郡における教科書類の流通	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 書物・出版と社会変容	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 129
2. 論文標題 兔屋の書籍出張販売	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 紀要 言語・文学・文化 (中央大学文学部)	6. 最初と最後の頁 85-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸・國分美奈穂・湯沢友実・原田和佳・乙部桃子・小野澤美優・畑中彩花	4. 巻 65
2. 論文標題 《共同研究》大阪の書籍安売業者について考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央大学国文	6. 最初と最後の頁 63-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 127
2. 論文標題 東京書肆の書籍安売 正札屋・鶴声社・金桜堂と兎屋	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 紀要 言語・文学・文化	6. 最初と最後の頁 97-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 125
2. 論文標題 脩道館補説	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 紀要 言語・文学・文化 (中央大学文学部)	6. 最初と最後の頁 73-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸・友成毅・金子美樹・大石明香里・國分美奈穂・増田凜々・湯沢友実	4. 巻 63
2. 論文標題 『静岡大務新聞』所掲書籍安売広告をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中央大学国文 (中央大学国文学会)	6. 最初と最後の頁 79-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 50
2. 論文標題 大東急記念文庫所蔵写本『書籍目録』覚書	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 かがみ (大東急記念文庫)	6. 最初と最後の頁 83-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 巻 13
2. 論文標題 陸前古川における新聞・雑誌・書籍の流通 領収証の束から浮かび上がるもの	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 書物学	6. 最初と最後の頁 66-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊幸・恵良友貴・友成毅・金子美樹・大石明香里	4. 巻 62
2. 論文標題 『山梨日日新聞』『甲陽日報』所掲書籍安売広告をめぐる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中央大学国文	6. 最初と最後の頁 59-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鈴木俊幸
2. 発表標題 上総の書籍流通
3. 学会等名 書物・出版と社会変容
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 平木浮世絵財団編、鈴木俊幸等執筆	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小学館	5. 総ページ数 543
3. 書名 平木浮世絵コレクション大全	

1. 著者名 藤本幸夫編、鈴木俊幸等執筆	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 877
3. 書名 書物・印刷・本屋 日中韓をめぐる本の文化史	

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 457
3. 書名 書籍文化史料論	

1. 著者名 鈴木俊幸	4. 発行年 2018年
2. 出版社 高美書店	5. 総ページ数 417
3. 書名 信州の本屋と出版 江戸から明治へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------